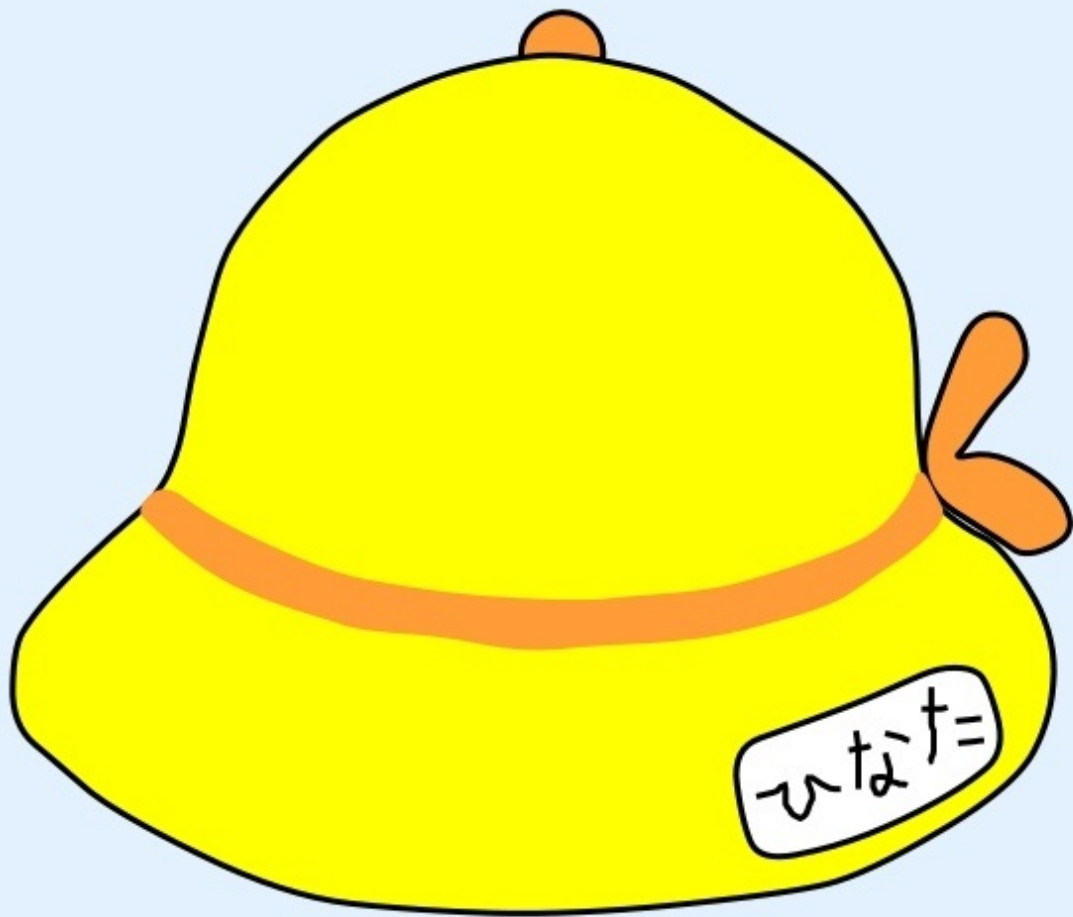


# 僕らの事情

～ひなたの場合～



澤村多門

わたしのなまえは、てらしまひなたです。4さいです。パパとママはおいしゃさんです。にいには、だいがくというところでべんきょうしています。

パパはものしりで、なんでもひなたにおしえてくれます。ぜったいにひなたをおこりません。いつもニコニコしています。

ママは、おりょうりがじょうずです。ひなたがすきなたべものをいつもつくってくれます。でも、おこるととてもこわいです。ひなたはいつもないてしまいます。でも、ママがおこるのは、ひなたがわるいことをしたからなんだって。「はんせいしなくちゃいけないよ」って、パパはいいます。

にいには、ひなたをようちえんにむかえにきてくれます。せんせいに、「きょうはわかいほうのパパがおむかえよ」っていわれると、とてもうれしいです。にいには、マキちゃんちのパパよりも、ヒロトくんちのパパよりもわかくてかっこいいからです。

わたしは、パパもママもにいにもだいすきです。

ゆうごはんのときのことです。きょうのメニューはハンバーグ。ひなたも、にいに、パパもだいすきなメニューです。

「ねえ。パパとにいにのちんちんは、いつはえてきたの？」

にいにがのんでいたビールをふきだしました。きたないなあ。パパはわらって、にいにをみえています。ママもわらっています。

「にいには、生まれた時からあったけどね。パパはちがうかもしれないね」

「パパも生まれた時からあったよ」

「ひなたも、そのうちはえてくるのかな？」

「絶対に、それはない！」

にいにがめずらしく、きっぱりといいました。

「ママも？」

「そうねえ。ママも無理だねえ」

なっとくできません。パパと、にいにはずるい。なんで、ひなたとママにはないんだろう。こういうのをふこうへいっていうんじゃないのかな。

ママが笑って、「パパも光ちゃんもずるいよねえ。ママもひなたも欲しかったねえ」といいました。ひなたは、うなずきました。

「でもね、ひなた。ひなたもママも、見えない所にもっと大切な場所があるんだよ」

パパがおだやかにいいました。

「赤ちゃんが育つ場所が、ひなたの体の中にあるんだよ。見えないけど、すごいことだと思わない？」

みえないんだもの。わかりません。

「ひなたはね、生まれる前に、十か月も、ママの体のその場所で過ごしたんだよ。十か月もずっと一緒だったんだ。眠る時も、お風呂に入る時も、トイレに行く時も、ご飯を食べる時も。お仕事をしている時も。パパは、すごくうらやましかったな。ひなたもママも女の子だから、そういう場所があるんだよ。うらやましいなあ」

ひなたは、ママとずっといっしょだったんだ。うまれるまえからずっと。

「すごいね」と言うと、

「うん。すごいね」と、パパもママも、つづけていいました。にいにだけは、ほっとしたようにおおきいきをはきました。

「にいにはおとこのこなのに、どうして、ひなたはおんなのこなのかな」

「それはね。パパの赤ちゃんの素と、ママの赤ちゃんの卵が出会った瞬間に決まるこ

となんだよ。その出会いの瞬間ばかりは、神様が決めるのかもしれないね」

かみさま。

「ひなたが、今ここで、ハンバーグを食べているっていうのは、当たり前みたいだけど、奇跡的なことなんだ」

きせき。

きょうのパパは、なんだかおとぎばなしをしてくれているみたいです。ドキドキします。

「光介、お前、これくらい答えられなくてどうするんだ。まったく」

「簡単に説明するの、意外と難しいんだよ。どこまで話していいかわからないし」

にいには、にげるようにおかわりをとりにいきました。ひなたは、ハンバーグを1こパパにわけてあげました。ハンバーグは、パパのだいこうぶつだからです。

「パパ、ついでにこれもあげる」

ピーマンをおさらにもりつけようとしたら、パパにハンバーグもかえされました。

「たくさん食べて、大きくなるとね。好き嫌いはだめだよ」

ピーマンはきれいなのに。パパにはおみとおしでした。

ようちえんで、おたよりをわたされました。らいげつのにちようびに、おとうさんさんかんびがあるようです。せんせいのおはなしでは、おやこできょうりよくして、みんなのまえではっぴょうをするんだって。ひなたはなにをしようかな。うたをうたおうかな。おえかきしたえをみせようかな。

にいにがきょうもむかえにきてくれました。

「にいに、らいげつのおさんかんびにきてくれるよね」

「参観日？」

「おとうさんさんかんがあるの。ようちえんのせんせいがね、にいにでもいいっていつてくれたよ。いつもみんなにいわれるの。ひなたちゃんのパパはわかくてかっこいいねって。

ね、にいに、いいでしょう？」

にいには、少し困った顔をしました。

「にいには、いいけどさ。でも」

「ほんとう？やったー」

そうときまったら、にいにとうちあわせです。

「いっしょにうたをうたおうよ」

「ひなた、音痴だからなあ。僕にどうやって合わせろっていうの」

にいには、ときどきとってもいじわるです。しかも、いじわるなことをいつているのに、ぜんぜんきがついていません。だから、かのじょとけんかするんだよ。

「じゃ、おえかきでいい。おはなしのなかのえをかこうよ」

おうちにかえって、にいにとテレビをみていたら、ママがかえってきました。ようちえんでもらったおたよりをみせました。

「お父さん参観日か」

「にいにがきてくれるって」

「パパは？」

「パパは、こなくていい」

「ひなたのパパは、光ちゃんじゃないでしょ」

ひなたはママをにらみました。ママもひなたをにらみかえします。おんなのたたかいです。でも、まけられません。

「にいにがいいもん。わかくてかっこいいパパねって、みんなほめてくれるもん」

「だめです。ひなたのパパは、周平でしょ」

「やだ。だって、パパ、おかみがしろいし、マキちゃんやヒロトくんのパパより、としをとってるもん」

「ダメなものはダメ！参観日は、パパに行ってもらいます」

「ママのいじわる」

ひなたはそういつて、おしいれのなかにもぐりこみました。ひなたのかくれればしょです。いつもこうしていると、にいにがむかえにきてくれます。さいごには、ママだってあやまってくれます。わるいのは、ひなたじゃないもん。

でも、きょうはだれもきてくれません。

まっても、まっても、だれもきてくれません。

おおきなこえでなくても、にいにをよんでも、ママをよんでも、だれもきてくれません。

つかれてしまいました。

「ひなた、ごはんだよ」

パパの声がしました。

「いらない。ママのつくったごはん、たべたくない」

「ひなたの好きな、オムレツだよ」

おなかがなりました。

「でも、いらない」

パパが、でんきをつけました。

「パパが髪を黒くしたら、参観日に行ってもいいかな」

そういった、パパはなんだかとてもさびしそうでした。

ひなたは、とってもわるいことをしたんだとおもいました。パパが、こんなかなしそうなかおをするようなことをいっちゃったんだ。

ママに、ちいさいころいわれたことがあります。「人の体と、自分が違うからって、笑っちゃいけないよ。その人が、つらそうにしていたら、笑う前に助けてあげなさい。目の色や、肌の色が違っても、笑っちゃいけないよ。それは絶対に変えられないんだから」って。ひなたがしたことは、パパのことをわらうのといっしょだったんだ。パパをきずつけちゃったんだ。

「ごめんね。パパ。パパの髪の毛、大好き。ふわふわで、おばあちゃんちのジジみたい」

おばあちゃんちでかっている、ミニチュアシュナウザーのジジは、いたずらっこで、まんまるのめで、ふわふわしていて、やわらかくて、あったかくて、とてもかわいいのです。

「そうかー。ジジかー」

パパはそう言ってわらいました。

「せめて、ハスキー犬にして欲しかった」

「ハスキーは、まっすぐなけだから、ちがうでしょ」

ひなたは、パパのおかみをくしゃくしゃとなでました。パパは、ひなたをひょいとだきあげると、かたにのせてくれました。

「さんかんび、にいにといっしょにきてね」

やっぱり、にいにはきてほしいのです。だって、せんせいたちもたのしみになっているから。

「わかった。わかった」

パパと、ごはんを食べるへやにいくと、とってもいいにおいがしました。ママは、おこっているのかな。ひなたが、わるいこだから、きれいになっちゃうかな。ママのつくったごはん、たべたくないなんていったの、わかっちゃったかな。ママのかおが、こわくてみれません。

パパが、ぎゅっとひなたをだきしめてくれました。

ひなたは、ママをみて、「ママ、ごめんなさい」といいました。

ママは、ほほえむと、「いいよ」といいました。

パパにおれいをしなければなりません。だいすきなオムレツをすこしわけてあげました。それから、すこしだけ、にがてなグリーンピースをパパのおさらにつまみました。

「ひなた、好き嫌いはいけないよ」

パパにはおみとおしでした。

きょうはさんかんびです。にいとパパはすこしおしゃれをしました。だしものは、にいといっしょにかいたえにしました。でも、にいにはとてもへたで、ひなたはすこしがっかりしました。

「光介も、一生懸命描いたんだから、笑っちゃいけないよ。ところで、光介、これは熊？」

「猫だよ！」

にいには、えのせんせいにはなれません。

にいとてをつないでようちえんにいきました。せんせいが「おはよう」のあいさつをしてくれました。

だしものをするとき、みんなでいっせいにてをあげました。でも、ひなたは、きんちょうして、なにより、にいのへたなえをみられるのもかなしくて、てをあげられません。みんながじゅんぼんにはっぴょうしていきます。うたをうたうこもいれば、ふたりでつくったこうさくをみせるこもいます。ヒロトくんは、まんざいをしました。マキちゃんは、パパとダンスをしました。

「ひなたは、手をあげないの？」と、パパにきかれました。このまま、なにもなく、じかんだけすぎちゃえばいいのに。おべんとうのじかんになって、やらなくてすめばいいのに。

みんなのはっぴょうがおわりました。チャイムがなりました。おべんとうのじかんです。よかった、なにもしなくてすんだとおもいました。

「まだ、発表が終わっていないお友達はあるかな」

ひなたはかおをふせました。せんせいにみつかったらたいへんです。となりで、にいがつつきました。

「はい、終わっていません」

よせばいいのに、パパがてをあげました。

パパのおせっかい。やっぱり、パパはよぶんじゃなかった。こんなことなら、いちばんさいしょにてをあげて、えをみせればよかった。

「ひなた、パパとピアノを弾こう」

「むりだよ。ひいたことないもん」

「音楽会できらきら星を上手に弾けたら。パパも弾けるから、一緒に弾こう」

「いやだよ。おともだちもみんなひけるのに。みんなとおなじはいや」

パパは、ひなたのうでをぐいとひっぱりました。



ひなたがずるをしようとしたから、パパはおこったのかな。できないし、はずかしいし、なきたいきもちになりました。

おおきないすのかたほうにパパがすわり、もうかたほうにひなたがすわりました。

「イチ、ニィ、サン、ハイ」

ド・ド・ソ・ソ・ラ・ラ・ソ。

ファ・ファ・ミ・ミ・レ・レ・ド。

そこまで、パパとおなじようにひきました。ひなたがたかいおと。パパがひくいおと。

「そんなの、おれだってできるよ」

いじめっこのだいきくんのこえがしました。コラッというこえ、くすくすというわらいごえがきこえます。

「ひなた、ウォーミングアップは終わり。ひなたは、音楽会で弾いたとおり弾いてごらん。パパが伴奏をするからね。パパにつられちゃいけないよ」

そうって、パパはもういちど、「イチ・ニィ・サン・ハイ」といいました。

あれ？ひなたはさっきとおなじようにひいているのに、まったくちがうおんがくになりました。それは、とてもとてもたのしいおんがくでした。パパのおとがとびはねたり、とまったり、ゆびもとんだりはねたり、ひなたがちょっとまちがえても、おんがくかいのときみたいにめだちません。

ひなたとパパはいっしょにひきおわりました。そのしゅんかん、みんながおおきなはくしゅをしてくれました。なんだろう。これってとってもきもちがいいです。はずかしくて、かおがあついけれど、なんだかとっても。

「せんせい、あのね。にいにともおえかきをしました。うまくかけなかったけど、いっしょにかいたの。ろうかにはってもいいですか」

せんせいはにっこりわらって、「ひなたちゃん、がんばったんだね。おべんとうのじかんにはりましょうね」といいました。

パパがひいたきょくは、「ジャズ」っていうんだって。にいにがおしえてくれました。

「すごいね、ジャズって。おんがくかいでひいたときよりも、ずっとたのしかったよ。ひなた、あんなにたのしくひいたことなかったよ」と、ひなたがいうと、にいにがじっと、ひなたのめをみました。

「それはさ、やっぱり、パパと弾いたからじゃないかな。パパ、ずっとひなたのこと見て弾いていたんだよ。にいには、ひなたが音痴だから合わせられないなんて言ったのに、パパはずっと見ていてくれたんだ。それに、パパもさ、ひなたと弾けて楽しか

ったんじゃないかな」

ひなたは、もうすこしおおきくなったら、パパにピアノをおしえてもらおうとおもいます。

ふゆのさむいひのことです。そとは、どろだらけでぐちゃぐちゃであそべません。おゆうぎしつは、ぞうぐみがつかっています。ひなたは、えほんをよむことにしました。

とても、かなしいえほんでした。

おとこのこが、さいごにはしんでしまい、そのそばにいぬがねむるようにしんでいるはなしです。

しぬ、ってなんなのかな。

しんだらどうなるのかな。

パパも、ママも、にいにも、いつかはおとこのこみたいに、ワンちゃんみたいにしんじょうのかな。

もしかしたら、ひなたも？

そんなことをかんがえたら、こわくて、かなしくてないてしまいました。

おともだちが、みんな「どうしたの？」ってきいてくれます。せんせいも「ひなたちゃん、どうしたの？」ってきいてくれます。でも、いじわるをされたわけでもないの、うまくこたえることができません。

ゆうがた、パパがむかえにきてくれました。

「ひなたちゃん、昼からずっと泣いていて。聞いても答えてくれないんです。絵本を読んでいたみたいなんですけど、何の本かも教えてくれなくて」

せんせいが、こまったようにパパにいいました。

「そうですか。お手数掛けました。教えてくださってありがとうございます」

パパはせんせいにあたまをさげました。

せっかく、パパがむかえにきてくれたのに。どうしてこんなかなしいきもちなのかな。

「よし、ひなた、帰ろうか。先生にさようならって言うんだよ」

「せんせいさようなら」

ちいさなこえで、ひなたはあいさつしました。

「ひなたちゃん、さようなら。先生、明日はひなたちゃんの笑った顔が見たいな」

「はい」

パパがかたぐるまをしてくれました。

「ひなた、今日は寒いな。おうちにかえたら、先にお風呂に入っちゃおうか。泡風呂にしちゃおう。楽しいぞ」

「ママにおこられるよ」

「掃除しちゃえば、大丈夫さ。な、決まり。パパも泡風呂入りたいしさ」

「うん」

ぴゅうっとつめたいかぜがふきました。ひなたは、パパのあたまにしがみつきました。

おうちにかえって、パパといっしょにおふろにはいりました。あわあわのおふろです。パパは、ひなたのかおに、おひげをつくってあそびました。ひなたは、パパのおかみをさわってあそびました。ふたりでおおきなこえでわらいました。

「どうして泣いたの？」

ひなたは、よんだえほんのはなしをしました。とても、かなしいきもちになったこと、こわくなったこと、どうしてかわからないこと。

「パパも、ママも、にいにも、いつかしんじょうの？」

「そうだね。年の順で言ったら、パパが最初かな」

「ひなたも？」

「ひなたも。おじいちゃんや、おばあちゃん、ジジ、幼稚園の先生、世界中の人たち、生き物は、いつかみんな死ぬ」

「しぬって、どういうことなの？」

「お話ができなくなる。息ができなくなる。考えられなくなる。心臓が止まる。動けなくなる、ってことかな」

「こわいね」

パパも、「こわいね」といってうなずきました。

「パパとおはなしできないなんて、さびしいよ」

「そうだね。パパも、ひなたとお話ができないのはさびしいな」

「しんだら、そのあとどうなるの？」

「微生物っていう、目に見えない小さな虫のようなものが、食べてくれるんだよ」

こわすぎます。たべられちゃうなんて。ひなたは、じぶんのをみました。いまでも、むしたちが、ひなたのからだをたべているのかもしれない。

「最後には、土に還って、それを栄養にして植物たちが育って、生きている人たちの役に立つんだよ。ひなたが食べている、お肉、お魚、野菜は、全部そうやって生まれたもの。生きるってことは、死ぬってことの裏返しなんだ。ひなたは、生きるってことは怖くないだろう？死ぬってことも同じくらい当たり前のことなんだよ」

「パパ、すこしのぼせた」

「あ、ごめん！」

パパと、あわてておふろからでました。

「ひなたには、まだ難しいか」

パパのいっていることは、なんとなくわかりました。ひなたたちがいきている、「しくみ」をおしえてくれたんです。しぬことはあたりまえだから、こわくないっていつてくれたんです。

「しんじゃったら、こころはどうなるの？なくなっちゃうの？」

パジャマにきがえてから、パパにききました。パパは、くびをよこにふりました。

「それは、パパにもわからない」

パパにもわからないことがあるんだ。

「だからね、生きている今を大切にしなきゃいけない。一緒にいる人を大切にして、たくさんの思い出を作って、お互いにプレゼントするんだ。もし、死んでしまう時に、すべてを忘れてしまったとしても、生きている人がその人を忘れないでいられるようにね」

「でもね、パパ。パパや、ママのことをわすれないようにすることはできるよ。でも、ひなたがしんじゃったら、だれがひなたをおぼえていてくれるのかな。そのときはもう、パパたちはいないんだよ。ひなた、ひとりだよ」

パパは、ひなたのあたまにてをおきました。「だいじょうぶ」といっているようなきがしました。

「ひなたにすごく好きな人ができたら、その人といっしょにいればいい。そのときは、ひなたがママになる番だよ。そうやって、続いていくんだ。一人じゃない。それに、お友達だって覚えていてくれる。忘れないでいてくれる人たちをつなげていくんだよ」

あんしんしました。パパがいなくなっても、ママがいなくなっても、だれかがきっとひなたをおぼえていてくれます。きっと、さびしくありません。

「パパは、ママのことがすごくすきだったの？だから、ママがひなたのママになったの？」

「そうだよ。よし、じゃあ、ひなたにとっておきを見せてあげよう」

なんだろう。パパはこんどはなにをおしえてくれるんだろう。ひなたはとってもドキドキしました。

パパはビデオをいれました。

みずいろのぬのがうつりました。おなじようなふくをきたひとがなんにんか、ちがういろのふくをきたひと、みんなマスクをしています。ベッドのうえにはだれかがねています。

ひなたは、パパのひざのうえにのって、それからしがみつきました。パパがぎゅっとだきしめてくれます。

「このへやは、なに？」

「病院だよ」

「ねているひとはだれ？」

「よく見てごらん。ひなたの知っている人だよ」

おそるおそるみました。あまりはっきりしていないのでわかりません。

「とおくてわからないよ」

そういったのとどうじに、そのひとのかおががめんいっぱいになりました。おんなのひとです。くるしそうなかおをしています。

「ママだ。びょうきななの？くるしそうだよ。だいじょうぶ？」

「うん、だいじょうぶ。これから、ママはすごく頑張るから、一緒に応援してあげよう」

パパはそうって、ひなたのてをにぎりました。

テレビから、ママのいたそうなこえがきこえました。ないているようなこえです。

「まわりにいるひとはだれ？」

「看護婦さん」

かんごふさんたちが、ママにこえをかけています。ママのてをにぎったり、からだをさするひともいます。

ふいに、べつのいろのふくをきたひとが、「いきんで！」といいました。ママのいきがとまり、すすりなくようなこえがしました。

「あほう！泣いている場合か！赤ん坊が頑張ってるんだろうが！」

なんだかとってもえらそうなひとです。

「この、えらそうなひとはだれ」

「...お医者さん」

おいしゃさんはだいきらいです。いたいちゅうしゃをしたり、にがいくすりをだしたりします。おなじおいしゃさんでも、きっとママとパパはちがうとおもいます。

すごくながいじかんでした。

「よし、あと少しだからな。頑張れ」

がめんのおいしゃさんのこえがしました。

きがつくと、パパはいっぱいあせをかいていました。ひなたのてを、ちからづよくにぎっています。ときどきいたいくらいです。

ママのこえのあとに、あかちゃんのおおきななきごえがしました。さっきのおいしゃさんが、だいています。おへそになにかがつかつなっています。あかちゃんはなきつづけています。なんだかとってもよごれています。かわいくなんてありません。でも、おいしゃさんは、とってもたいせつそうにあかちゃんをだいています。

ママのかおがうつりました。ないています。すぐにママのそばにあかちゃんがやってきました。

「おめでとう。元気な女の子だ。涼子、やったな。俺たちの子だ。本当にありがとう。ほら、すごく泣いてる。かわいいなあ」

ママと、パパ？

あの、いちばんえらそうなひとが、パパ？

ということは、かわいくないあかちゃんはひなた？

おどろきです。

パパにはなしかけようとおもったら、はなみずをすすりながらないていて、ひなたはもういちどびっくりしました。パパがなくなんて。

「パパ？」

パパはぎゅっとだきしめてくれました。それから、「生まれてきてくれて、ありがとう」と言いました。

なきやんで、ビデオをとりだしてしまったパパに、かんそうをいおうとおもいました。

「ひなた、かわいくなかったね」

「大きな声で泣いて、とってもかわいかったよ。手だって、とっても小さくて」

そんなのはうそです。

「きたなかったよ。おさるみたいだった」

「ひなたはね、すごく狭くて真っ暗な道を一人で生まれてきたんだよ。暗くて、怖かったと思う。ひなたも頑張って生まれてきたんだ。ひなただけじゃない、みんなそうやって生まれてくるんだよ」

パパはそういうと、アルバムをもってきてくれました。ママにだかわれているしゃしん、おっぱいをのんでいるしゃしん、パパや、にいににもだっこされています。

「ほら、かわいだろう？」

おもいで。

パパやママやにいには、こうやってひなたをたいせつにしてくれていたんだね。おじいちゃんも、おばあちゃんも。ひなたをだっこしてくれたんだね。ひなたはなにもおぼえていないけれど、これからはひなたがおぼえていくばんなんだね。

「パパ、だいすきだよ」とひなたはいいました。

にいが「ただいま」といってかえってきました。ひなたは、はしって行って、とびつきました。

「おかえり」

「ただいま。元気いな！」

「にいに、だいすき！」

「にいにも、ひなたのこと大好きだよ」

そうって、にいにはだきあげてくれました。にいにも、きっとあかちゃんのあるところがあったんだね。

にいとパパがごはんをつくっていると、ママがざんぎょうからかえってきました。

「ママおかえり！だいすき！」

「ありがと、ひなた」

「きょうね、パパとね、いっぱいおはなししたの」

ママはにこにこしながらきいてくれました。

「どんなお話？」

「いきものがしんだらどうなるかっておはなし。それからね、ひなたがうまれたときのビデオもみたの」

「どうだった？びっくりしたでしょ」

「うん。ママ、くるしそうだった。ひなたもいっぱいないてた。ね、ママ、ひなたをうんでくれて、ありがとう」

そのとき、ママがなみだをうかべました。

きょうは、パパも、ママも、ないちゃうひなのかな。ふたりともかなしいのかな。なんでなみだってでるのかな。

「娘に、そんな風に言ってもらえる日がこんなに早く来るなんて、感動的だよな」

「うん。夢みたい」

「あわあわのおふろにもはいったの！」

ママがパパをにらみました。



「こっちも、いろいろあったんだよ！」

ビデオではあんなにえらそうだったパパなのに、ママにはとってもよわいです。どうしてかな。ひなたがうまれたあと、なにかあったのかな。

てらしまひなた。4さいです。

まだまだ、わからないことがいっぱいあります。だいすきなひとたちとくらしています。とっても、とっても、しあわせです。

(了)

## あとがき

---

このたびは、「僕らの事情2 ひなたの場合」を最後まで読んでくださり、ありがとうございます。「大人が読んでも楽しい児童書」という位置づけで書いてみました。ひなたの視点で書いたので、ひらがなばかりで読みにくいことをこの場を借りてお詫びします。

ひなたは、「事情1」の主人公である、光介の異母妹のお話です。私自身の子供の頃の疑問を掘り起こしてみました。

周平のパパぶりは、どうでしたか？こんな風に、光介のことも育てたのかな…。自分で書いていて、想像が膨らみました。

「僕らの事情」は、まだまだ続きます。お時間をとらせてますが、時々彼らの生きざまを見ていただけると嬉しいです。

2010年11月27日

澤村多門